法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

敦煌写本『啓顔録』について ： 狂言「附子」の淵源を明らかにした唐代の古写本

SUZUKI, Yasushi / 鈴木, 靖

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究：能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
40
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
25
(発行年 / Year)
2016-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012831

敦煌写本『啓顔録』について

―狂言「附子」の淵源を明らかにした唐代の古写本―

鈴木　靖

狂言「附子」は、今日のような主従狂言になる以前、「はうす(坊主)」と「二人の者(新発意?)」を登場人物としていたことが、現存最古の狂言集である『天正狂言本』からわかっている。この初期の狂言にみられるモチーフ、昔話研究でいうところの「飴は毒」型の「和尚と小僧譚」は、鎌倉時代の十三世紀に無住が著した『沙石集』にも記録されているため、この狂言は無住の書か、あるいはそれに近い形の昔話に取材したものと考えられている。(1) では、この話はわが国独自のものなのであろうか、それとも他の国々との間に何らかの繋がりを持つものなのであろうか。

『近世日本に於ける支那俗語文学史』の著で知られる石崎又造は、狂言の淵源を中国に求めようと、戦前、六種の作品(宝の笠、土産の鏡、料理聟、附子、成上者、魚説法及骨皮新発地意)について中国笑話との関連を調べている。しかし「附子」については宋代の笑話集の中に次のような類話を見つけただけであった。(2)

荊王に不死の薬を献じた者がいた。射士がこれを取って食べたため、王は射士を殺そうとした。(すると射士は)言った。「私は不死の薬だと思って食べたのに、いま私を殺したのでは、人殺しの薬ではありませんか」王は

笑って彼を赦した。[3]

これは『韓非子』説林上に見られる逸話を笑話に改作したものだが、類話というほどの類似性は見られない。ところが、石崎がこの論考を発表する三十八年ほど前、シルクロードのオアシス都市・敦煌の近くにある仏教石窟で、十一世紀ごろ封印されたと思われる石窟が見つかり、そこに蔵されていた大量の文書の中から、初期の狂言「附子」にきわめて類似した笑話を収めた写本が発見された。現在大英図書館に所蔵されている敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、以下「敦煌写本」と略）である。

むかし一人の僧が急に蒸しパンが食べたくなり、寺の外で数十個の蒸しパンと一瓶の蜜を買って、僧房の中でこっそり食べた。食べ終わると、残った蒸しパンを鉢の中に入れ、蜜の瓶をベッドの下に置いて、弟子に言った。「わしの蒸しパンがなくならぬようしっかり見張っておれ。ベッドの下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐに死んでしまうからな。」僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出し、蒸しパンにつけて食べ、残ったのは二個だけだった。僧が来て、取っておいた蒸しパンと蜜を出すようにいったが、蒸しパンは二個しか残っておらず、蜜もすっかり嘗め尽くされていた。（僧は）怒って言った。「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食べたのじゃ。」弟子は言った。「和尚様が去った後、蒸しパンのいい香りがしたので、がまんできずに取って食べてしまいました。和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の中の毒薬を飲んで死のうと思ったのですが、不思議なことにいまだに何ともありません。」僧は怒って言った。「どうすれば、あんなにたくさんの蒸しパンを平らげることができるじゃ。」弟子は鉢の中に残っていた二個の蒸しパンを手でつかむと、つぎつぎにほおばって言った。「こうやって平らげたんで

す。」その僧がベッドを降りて大声で怒鳴ると、弟子はすぐに逃げていってしまった。(4)

この写本には巻末に題識があり、そこから劉丘子なる人物が唐の開元十一年(七二三年)に書写したものであることがわかっている。この写本の発見により、中国ではわが国の『沙石集』よりもさらに五百年以上前にこうしたモチーフが語られ、しかもそれが当時の都・長安から千五百キロも離れた砂漠のオアシス都市にまで広く伝わっていたことが明らかになったのである。

では、この『啓顔録』は、いつ、誰によって編まれたのか。また敦煌写本はその発見以前から知られていた『太平広記』所引の諸作品とどう異なるのか。そして、そもそもなぜ石窟の中に封印されたのか。本稿では、近年における中国での研究成果を踏まえ、これらの点について考えてみたい。

『啓顔録』の作者

『啓顔録』の作者については、これまで隋の侯白というのが通説であった。これは五代十国から南宋にかけて編纂された三種の書誌目録(後晋の開運二年(九四五年)成書の『旧唐書』経籍志、北宋の嘉祐六年(一〇六〇年)の『新唐書』芸文志、南宋の鄭樵の『通志』芸文略)が、いずれも『啓顔録』の作者を侯白としているからである。

しかし、近年中国では、張鴻勲氏をはじめとする多くの研究者がこの説に異議を唱えている。その理由としては、①隋の滅亡から間もない、唐の貞観十年(六三六年)に完成した『隋書』列伝の中の侯白伝や、顕慶元年(六五六年)に完成した『隋書』経籍志の中に、『啓顔録』の記載が見られないこと(侯白の別の著書である『旌異記』十五巻は、伝・志ともに記載されている)、②敦煌写本の中に唐初の人物(李勣、温彦博、杜如晦、崔行功など)が登場すること、

③侯白の自述に「侯白は・・・」という古人の習慣に合わない表現が見られること、などが挙げられている。[5]

いま敦煌写本を見ると、確かに作者の名は記されていない。また時代が下って南宋時代の陳振孫『直斎書録解題』[6]にも作者不詳のテキストがあったことが記録されている。

『啓顔録』八巻、不知作者。雑記詼諧調笑事。『唐志』有「侯白『啓顔録』十巻」、未必是此書、然亦多有侯白語、但訛謬極多。

『啓顔録』八巻、作者不詳。ユーモアや冗談のことが雑記されている。『唐書』芸文志にある「侯白『啓顔録』十巻」というのは、必ずしもこの本でないのかも知れないが、やはり侯白の言葉を多く載せている。ただ誤謬がきわめて多い。

これらの点から考えると、侯白を『啓顔録』の作者としたのは後世の仮託であり、元来は無名氏の撰であったと考えるのが自然であろう。

では、なぜ『啓顔録』の作者に侯白が選ばれたのだろうか。それには彼の人柄と生涯が関係していると考えられる。『隋書』の侯白伝はその人柄と生涯を次のように記している。[7]

侯白、字は君素。勉強好きで頭の回転が速く、ユーモラスな性格でとりわけ弁舌に長けていた。科挙に合格して儒林郎となった。洒脱で偉ぶることなく冗談好きだったため、人気があり、彼のいるところはまるで市場のように見物の人だかりができた。楊素も彼と親しくしていたが、あるとき楊素と牛弘が朝議を終えて出てくると、

侯白は楊素に言った。「日之夕矣(夕暮れ時ですね)」楊素は大笑いして言った。「わしらが山を降りてきた羊や牛だというのか。」隋の高祖もその名声を聞き、宮中に召して話をしたところ、彼のことが気に入り、秘書省で国史の編纂に当たらせた。その後、栄転の話が出るたびに、高祖は「侯白はその任に耐えん」といって彼を宮中に引き止めた。後に五品官の禄を得たが、一ヶ月あまりで亡くなった。当時の人々はその薄命を悼んだ。著書に『旌異記』十五巻があり、世に広く行われている。

この中の侯白と楊素の逸話については、やや説明が必要だろう。これは『詩経』の中の「君子于役」という詩を踏まえたものである。

君子于役　戦争に行ったあなた
不知其期　終わりの見えぬこの戦い
曷至哉　いつ帰ることができるのでしょう
雞棲于塒　鶏は巣の中
日之夕矣　夕暮れ時になり
羊牛下来　羊や牛たちも山を降りて来ました
君子于役　戦争に行ったあなた
如之何勿思　どうしてあなたのことを思わずにいられましょう

教養があり、またユーモアにも長けた侯白は、楊素と牛弘が二人揃って宮中から出てくるのを見ると、すぐにこの詩の中の「羊(楊)牛下来」(「楊」と「羊」は同音)という句を思い出した。とはいえ、二人は朝廷の重臣であるから、これをそのまま口に出すわけにはいかない。そこで侯白は、歇後語(前の句だけをいい、後の句を連想させる言葉遊び)のように「日之夕矣」という前の句だけを言い、「羊(楊)牛下来」という後の句を連想させた。楊素も文武両道で知られる軍師であったから、すぐに侯白のユーモアを理解し、「わしらが山を降りてきた羊や牛だというのか」と笑って応じたのである。

侯白のこうしたユーモアは、やがて高祖の耳にも入り、抜擢されて宮中の秘書省に入ることになった。ところが、よほど高祖に気に入られたのだろう、その後、転出の話が出るたびに反対され、役人としては不遇な生涯を終えることになった。

中世ヨーロッパにCourt Jesterなどと呼ばれる宮廷道化師がいたように、中国の宮廷にも専門の道化師がいた。『啓顔録』には北斉の高祖に仕えた石動筩[8]という「弄癡人」(道化師)が登場する。侯白もユーモラスな人柄で、人だかりができるほどの人気者であったというが、石動筩のような道化師ではなかった。彼は当時始まったばかりの科挙に合格したエリート官僚であり、『旌異記』の著者としても知られた文人であった。後年、彼が『啓顔録』の作者に仮託されたのは、恐らく当時の人々がそのユーモラスな人柄を愛し、また、そのユーモラスな人柄ゆえに役人としては不遇な生涯を終えることになった「薄命」に同情したからであろう。

『啓顔録』の成立年代

前述のように敦煌写本の巻末には次のような題識がある。

開元十一年捌月五日、寫了。劉丘子於二舅□（破損のため末字一字不詳）
開元十一年八月五日、写本終了。劉丘子、二番目の母方の叔父の□にて

この題識から敦煌写本が作られたのは唐の開元十一年（七二三年）であることは明らかである。では、この写本の原本である『啓顔録』はいつごろ成立したのであろうか。

董志翹氏は、テキストの成立年代の上限を唐の六四一年（貞観十五年）と推定している。その理由は、この年に成立した『隋書』の中に『啓顔録』に関する記事がまったく見られないからである。しかし、敦煌写本のように作者不詳で、その作品中にも李勣や温彦博、杜如晦、崔行功など多くの唐代の人物が登場することを考えれば、『隋書』の編者がこれを唐初の無名氏の撰と考え、記録しなかったとしても不思議ではない。むしろ成立年代の上限は、氏が挙げているもう一つの論拠、すなわち敦煌写本に登場する実在の人物から考えてみる方が確かであろう。

董志翹氏によれば、敦煌写本に登場する実在の人物の中でもっとも遅くまで生存していたのは、敦煌写本第三十四話「国初有人姓裴」に登場する温彦博であるという。

国初、裴という姓の人が宮中の護衛の任期が来たため兵部の試験を受けたが、一文字間違えたために不合格となってしまった。僕射の温彦博にこのことを訴えたが、そのとき温彦博は杜如晦と同席していたため、取り合おうとしなかった。すると、その人が言った。「私は子供のころから弁舌の明瞭さに自信があります。（宮中の）奏聞や伝宣であれば、通事舎人の任にも耐えます。文章も上手く、冗談も得意です。」そこで温彦博は考えを変え、その人と話してみることにした。ちょうど庁舎の前に竹が生えていたので、温彦博はこの竹で何か冗談を言うよ

うにと命じた。その人はすぐにこんな冗談を言った。「竹。風が吹けば青葉は粛々となびく。冬を越えても葉は落ちず、春になっても実はならぬ。『虚心』（謙虚の意。竹の『空心』とかけている）に国士を遇そうともせず、なぜ『節目』（面倒の意。竹の『節目』とかけている）ばかりを増やすのか。」温彦博は大喜びし、さらに言った。「奏聞や伝宣が得意なら、庁舎の前の塀に言葉を伝えてみよ。」するとその人は塀の前まで行き、「いま聡明なる陛下は、広く門戸を開いて士を迎えている。なのになぜお前は賢者の道を妨げるのか」と大声で言うと、塀を押し倒した。温彦博〔が「それは博（私）への当てつけか」と言うと〕[9]その人は「当てたのは『膊』（腕の意。温彦博の『博』とかけている）だけではございません、『肚』（腹の意。杜如晦の『杜』とかけている）にも当てました」と言った。その場に杜如晦がいたのでそう言ったのであろう。温彦博と杜如晦は大笑いし、その人を吏部に送って官職を与えた。

ここで注目したいのは「僕射」という官名である。温彦博が「僕射」すなわち唐代の宰相職である尚書右僕射を拝命したのは、その死の前年六三六年（貞観十年）である。温彦博がこの官名で呼ばれている以上、このテキストの成立年代はこの年を遡ることはありえない。つまり敦煌写本の原本は、六三六年（貞観十年）を上限とし、写本の題記にある七二三年（開元十一年）を下限とする八十七年の間に成立したことがわかる。

もっとも実際の成立年代は、この範囲の中でもかなり後の方と思われる。その理由としては、①この話の冒頭で温彦博の「僕射」在任時代、すなわち唐王朝の建国からすでに十八年以上が過ぎた六三六年から六三七年（貞観十から十一年）を「国初」（わが王朝の初期）と呼んでいること、②この話の中に登場する杜如晦は、実際には温彦博が「僕射」を拝命する六年前の六三〇年（貞観四年）に没しており、史実に合わないこと、の二点が挙げられる。

ちなみに八〇七年(元和二年)に唐の劉粛が著した『大唐新語』[10]にもこの話が紹介されているが、そこに登場するのは温彦博と裴略という人物だけで、杜如晦は登場しない。『啓顔録』が杜如晦を登場させたのは、彼の姓がちょうどこの話のオチに必要な「杜」だったからであろう。

敦煌写本と『太平広記』との違い

『啓顔録』には敦煌写本のほかに、その作品を引用した七種のテキストがある。その中で敦煌写本に次いで古く、また最も多くの作品を収録するのが、九七八年(太平興国三年)に宋の李昉らが太宗の勅命を奉じて編纂した『太平広記』である。敦煌写本は四十話、『太平広記』は六十九話を収録し、そのうち十七話が重出する。他の六種のテキスト[11]は、いずれも『太平広記』の系統のものと考えられている。

敦煌写本と『太平広記』所引の諸作品との違いについては、張鴻勲氏がすでに詳細な検討を行っているので[12]、ここでは新たに敦煌写本の第七話を取り上げ、『太平広記』所引のものとの違いについて考えてみたい。

隋に経論律の三蔵に通暁した法師がいた。父親はもと「商胡」(西方の異民族の商人)で、法師は中国の生まれだったが、容貌は「胡人」(西方の異民族)のようだった。徳行が高く、弁舌に長け、四月八日(釈迦の誕生日)に齋を設けて講説を行い、朝廷の役人から僧俗にいたるまで数千人が見物に集まった。弁舌に長けた大徳の名僧や役人たち十人あまりが(法師に)問答を挑んだ。法師はどんな難題にも当意即妙、理路整然と答え、誰も負かすことはできなかった。最後に観衆の間から十三歳になったばかりの趙という子供が現れた。人々は、法師の弁舌が人並みはずれており、またそれまでの相手も高名有徳な人物ばかりだったので、突然こんな小さな子供が問答に

現れたのを見て、不思議に思い笑った。子供は平然としたようすで席に着くと、この僧に向かって大声で言った。「むかしの野干和尚の話は仏典にも載っていますが、狐(キツネ、「胡」と同音)が闍梨(法師)になるなど、どこに書いてあるのでしょうか。」僧はすぐに言った。「きみは声ばかり大きくて体が小さい。その声で体を補ってはどうかな。」子供は答えて言った。「法師様は私は声が大きいのに体が小さいから声で体を補えと仰いますが、それなら法師様も眼が奥まっているのに鼻が長いので、その鼻を切って眼を補ってはどうでしょう。」人々はみな驚いて立ち上がり、大笑いした。(下略)

この話は『太平広記』巻二四八詼諧四にも「趙小児」の名で収録されている。ところが、傍線で示した「野干和尚」の部分は「野狐和尚」に改められている。これはなぜであろうか。

中国では『啓顔録』の校注本が二種出版されている。曹林娣・李泉輯注『啓顔録』(上海古籍出版社、一九九〇年、以下、輯注本と略)と董志翹箋注『啓顔録箋注』(中華書局、二〇一四年、以下、箋注本と略)である。両書を見ると、まず輯注本ではこの部分を『太平広記』に従って「野狐和尚」と校勘している。

昔野狐和尚自有經文。未審狐作闍梨出何典誥。

むかしの野狐和尚の話は仏典に載っておりますが、狐(キツネ、「胡」とかけている)が闍梨(法師)になるなど、どこに書いてあるのでしょうか。

しかし、これでは文意が通らないため、輯注本は「野狐和尚」について次のような注釈を加えている。

道を学びながらも邪僻に流れ、いまだ悟りを開けぬのに妄りに開いたと称す。禅家はこれを「野狐禅」という。

つまりこの一節は、次のような意味だというのである。

むかし野狐禅を行った和尚の話は仏典に載っておりますが、狐(キツネ、「胡」とかけている)が闍梨(法師)になるなど、どこに書いてあるのでしょうか。

輯注本のこの校勘と注釈は正しくない。なぜならば、敦煌写本の「野干和尚」とは、仏教経典に典拠を持つ言葉だからである。

「野干」とは、かつて南方熊楠が指摘したように、ジャッカルを指す音訳語である。[13] インドで誕生した仏教経典には、北アフリカから南アジアにかけて広く分布するキンイロジャッカル(Canis aureus)がしばしば登場するが、キンイロジャッカルは東北アジアには生息しないため、漢訳仏典ではしばしば原語のまま「野干」と音訳されている。八〇七年(元和二年)に唐の慧琳が著した『一切経音義』にも「野干」とは梵語(サンスクリット語)の悉伽羅(シュリガーラ)を指すと解説されている。

野干、梵語悉伽羅。形色青黄如狗、羣行夜鳴聲如狼也。字又作射干。案『子虚賦』云「騰遠射干」、司馬彪・郭璞等注並云「射干似狐而小、能緣木、射音夜。」『廣志』云「巣於危巖高木也」『禪經』云「見一野狐、又見野干」是也。

ちなみに「ジャッカル」という言葉自体も、このサンスクリット語のシュリガーラが中期インド・アーリア語、ペルシャ語、トルコ語を経て英語に入ったものという。[14]

「野干」を本来のジャッカルという意味に解釈すれば、敦煌写本の一節は次のように解釈することができる。

むかしのジャッカル和尚の話については仏典に載っておりますが、狐(キツネ、「胡」とかけている)が闍梨(法師)になるなど、どこに書いてあるのでしょうか。

ここにいう「ジャッカル和尚の話」とは、南朝斉の曇景が翻訳した『仏説未曾有因縁経』の中の次の仏教説話を指すと考えられる。

むかしインドに阿逸多という少年がいた。高貴なクシャトリアの出身だったが、家は貧しかった。聡明で学問を好み、十二歳で明師に師事し、深山で厳しい修行をした。師匠は昼夜を分かたず、彼を指導した。五十年が過ぎ、経論、医術、呪術、占いなど九十六種の学問に精通した。しばらくして国王が亡くなり、新たな王を選ぶことになった。阿逸多もこれに参加した。五百人の賢者が集まり、議論を行ったが、誰も阿逸多にかなわない。そこで群臣たちは阿逸多を新たな王に選んだ。王になった阿逸多は、師匠を都に招き、その教えに従って、百年の間、国を平和に治めた。その国の国境付近に二つの小国があった。両国は争いを続けていたが、その中の一国が援軍を得ようと、阿逸多に美女と宝物を贈った。喜んだ阿逸多は百万の精鋭を送った。百日に及ぶ激戦で兵の半数は亡くなり、負けた国の王とその一族は処刑された。阿逸多は美女に溺れ、国政を顧みなくなり、やがて外国

の侵略を受けて国は滅亡し、阿逸多も亡くなった。

阿逸多は地獄に落ちたが、師匠の教えに従って善行を修めたため、餓鬼から畜生へと転生して野干に生まれ変わった。野干となった阿逸多は、獅子に追われて井戸の底に落ちたところを、帝釈天に救われた。帝釈天はこの野干が深い学識を持つことを知り、

善哉善哉　和上野干　唯願説法　開化天人

善きかな、善きかな、野干和尚。説法により天人を開化されよ

と、八万の天人とともにその教えを聞くことにした。

実は阿逸多は仏陀の前世であり、その師匠とは弥勒菩薩のことであった。

この『未曾有因縁経』は、敦煌写本が作られたころにはよく知られた経典だったらしく、七三〇年(開元十八年)に唐の智升が編纂した『開元釈教録』の中の入蔵録(所蔵仏典目録)には、複数のテキストが記録されている。

さて、輯注本は『太平広記』に従って「野干和尚」を「野狐和尚」と校勘したわけだが、それでは『太平広記』はなぜこのような誤った訂正を行ったのだろうか。

前述のとおり、キンイロジャッカルは中国や日本などの東北アジアには生息しない。このため梵語の音訳である「野干」は、いつしかキツネと混同されるようになっていった。宋で『太平広記』(九七八年)が編纂されたころ、遼の希麟が著した『続一切経音義』(九八七年)には、前掲の慧琳『一切経音義』の解説に、さらに次のような補足(傍線部)が加えられている。

野干、梵語悉伽羅。此云野干、案青黄色形如狗、羣行夜鳴聲如狼。郭注『荘子』云「野干、能縁木」。『廣雅』云「巣於危巖高木」。又音夜干。與狐異也。『禪經』云「見一野狐、又見野干」明是二物也。（後略）

「野干はキツネとは異なる。『禅経』に『一頭の野狐に会い、また野干に会った』とあるように、明らかに別物である」と、わざわざ補足を加えなければならないほど、「野干」はキツネと混同されていたのである。

両者の混同は、日本へも早くから伝わっていたらしい。奈良時代の僧・景戒が著した『日本霊異記』には、キツネという言葉の由来譚として次のような興味深い説話が記録されている。[15]

欽明天皇の御世、一人の若者が広野で美しい娘と出会った。二人は夫婦となり、子供が生まれた。ところが、ある日、犬に吼えられた妻は、驚きのあまりその本性を現してしまう。妻の本性は「野干」だった。それを見た夫は、「汝與我之中子相生、故吾不忘汝、毎來相寐（お前と私の間には子供も生まれたではないか。どうしてお前のことが忘れられよう。来ていっしょに寝よう）」と言った。妻は夫の言葉に従い、それからも毎夜来ては共に寝た。これが「岐都禰」（来つ寝）、すなわちキツネの由来である。

景戒が『日本霊異記』を著したのは、奈良時代の末から平安時代の初めというから、日本でも八世紀の末から九世紀の初めには「野干」とキツネが混同されていたことがわかる。恐らく中国でもこのころから両者の混同が始まっていたのであろう。

一方、近年出版されたもう一つの『啓顔録』の注釈書である箋注本は、こうした点を考慮してか、敦煌写本の「野

干」には手を加えず、注釈の中で「野干」が狐とは異なる動物であることを詳述している。ところが、肝心の「野干和尚」については、輯注本に従い、「野狐禅」を指すとしている。箋注本の著者である董志翹氏は、輯注本の誤りを正した二〇〇六年の論考[16]の中で、前述の『佛説未曾有因縁経』を引用しているので、なぜ同経の中のジャッカル和尚の説話に言及していないのか不思議だが、この点は再考されるべきであろう。

以上、敦煌写本と『太平広記』所引の作品との違いを見てみたが、敦煌写本(七二三年)から『太平広記』(九七八年)までの二百五十年ほどの間に、『啓顔録』はかなりその姿を変えていたことがわかる。収録作品を見ても、両者に共通するものは全体の三割強に過ぎず、その内容も「野干和尚」の例に見られるように、誤った修正が加えられている。恐らくはこうした改訂作業の中で、狂言「附子」に類似したモチーフを持つ作品(敦煌写本第三九話)も散逸してしまったのであろう。

敦煌写本はなぜ蔵経洞に封蔵されたのか

最後に、敦煌写本『啓顔録』がなぜ蔵経洞の中に封蔵されたのかについて考えてみたい。

蔵経洞が封蔵された理由については、「避難説」と「廃棄説」の二説がある。「避難説」はフランスの研究者ペリオが唱えたもので、異教徒から貴重な仏教経典を守るために封蔵されたという説である。ペリオはその原因として、この地が一〇三五年頃、タングート族の西夏の攻撃を受け、その支配下に入ったことを挙げている。井上靖の小説『敦煌』のモチーフにもなった説だが、仏教を信奉していた西夏から仏教経典を守るというのはおかしいとして、今日では十一世紀初頭に仏教国・于闐国を滅ぼした、イスラム教国・カラハン朝の脅威を原因と考える研究者が多い。

これに対して、イギリスの探検家スタインが唱えたのが「廃棄説」である。スタインは一九二一年に出版した第二

次中央アジア探検(一九〇六～八年)の報告書の中で、蔵経洞は不用となった仏教経典などを納めた「神聖な不用品の貯蔵庫」であるという新しい考えを示した。この説は、敦煌写本『啓顔録』がなぜ蔵経洞に入れられたのかを解く鍵になると思われるので、少し詳しく見てみたい。

(蔵経洞から発見された)大量*の文書の中からは、一〇三四年から三七年の間に敦煌を征服し、その後二百年近くこの地を支配した西夏王朝あるいはタングート王朝の創始者(李元昊)が制定したあの奇妙な文字(西夏文字)はまったく見つかっていない。ところが洞窟の壁画には、数百字の漢字のほかに、いくつかの西夏文字がチベット文字やモンゴル文字、ウィグル文字とともにズグラッフィートのように漆喰の上に書き刻まれているのが見えた。となると、自然考えられることは、この小さな礼拝堂は、たとえばタングート族などの破壊的な侵攻が原因で封印され、その後、完全に忘れ去られてしまったのではないかということである。ところがこの密封された穴倉からは、もともと寺廟や僧院で神聖なものとして使用され、不用となったあらゆる種類のものを貯蔵する場所として使われていることを示す証拠も見つかっている。なかでも特筆すべきなのは、明らかに経典の端切れと見られる漢字を記した紙切れを、丁寧に包んで縫い上げた多くの小さな布袋である。中国の人々は、いまでも文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って焚き上げの儀式を行う習慣があるが、これらは明らかにそれと同じ俗信から集められたものであろう。(17)

*(　)内はいずれも引用者

スタインのいう「文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って焚き上げの儀式を行う習慣」とは「敬惜字

紙」の旧慣を指す。中国では古来、文字の書かれた紙を粗末にすると罰が当たり、逆にこれを大切にすると善報があるという俗信があった。たとえば、南宋の洪邁が著した『夷堅志』には、経典を粗末に扱ったために、悲惨な死をとげた人の話が記されている。[18]

分寧県の兜率寺に張天覚が著した『円覚経』があった。兵火の後、近くに住む黄という人がそれを手に入れた。寺の僧がこれを返すよう頼んだが、同意しなかった。黄は愚かな人だったので、それが尊いものであるとも知らず、紙が丈夫だったので、バラバラにして寝台の敷物にした。しばらくすると、らい病にかかり、体を腐らせて苦しんだあげく、数年後に死んだ。

これとは対照的に、明の郎瑛が著した『七修類稿』には、「敬惜字紙」の善行により、優秀な息子を授かったという人の話が紹介されている。[19]

宋の王沂公(王曾)の父は、文字が書かれた紙が落ちているのを見ると、必ず拾って、香りをつけたお湯で洗い、燃やしていた。ある夜のこと、夢に孔子が現れ、彼の背を叩いてこう言った。「お前は(儒教の)文字が書かれた紙を、なぜそんなに大切にしてくれるのか。お前が高齢で立身出世が望めないのは残念だが、後日、(弟子の)曾参をお前の家に転生させ、一族を繁栄させてやろう。」しばらくすると、夢のお告げのとおりに男の子が生まれたので、(曾参にちなんで)曾と名づけた。するとやはり夢のお告げのとおりに科挙に一番で合格した。*

*(　)の中はいずれも引用者

ここに登場する王沂公(王曾)とは、北宋の咸平年間、科挙の三段階の本試験(解試・省試・殿試)にすべて首席で及第し、後に宰相となった人物である。

スタインが中国を訪ねたころ、こうした「敬惜字紙」の習慣は各地で広く行われていた。スタインの報告書と同年に出版された片岡巌の『台湾風俗誌』にも次のような記事が見られる。[20]

本島人は老幼婦女に至るまで一般に文字を尊重する慣習あることは一度び臺灣の地に足を入るれば直に知るを得べし、彼の本島到る處の街庄に於て人々が醵金して一區毎に一人の老翁を雇ひ、街巷に落ち散れる文字ある紙の一切即ち新聞紙、名刺乃至廣告紙の破れ紙等、苟も文字あるもの一切を拾って籠に入れ、廟前又は街端、巷角にある所の「字紙爐」、即ち文字ある紙を燒く爲め設けある小亭狀の紙燒き爐に入れ燒き、其灰の積み溜まるに從て海中に投し、之れにて咸く清め盡したるものとなす風あり、之れ儒教崇拝より來たるものなりと云ふ。

一方、「敬惜字紙」の処分方法は、「火葬」だけではなかった。唐代には、蔵経洞と同じように土中に封蔵する「土葬」も行われていた。晩唐の劉蛻は、「破天荒」の故事――「天荒」(文運不毛の地)と呼ばれた荊州から初めて進士に及第し、「破天荒」と称えられた――で知られる人物だが、彼は唐の大中初年(八四七~八年)、梓州の兜率寺に十五年の受験勉強の間に溜まった廃紙二七八〇枚を埋め、そこに「文塚」を建立している。[21]

こうした「敬惜字紙」の習慣に着目したスタインは、蔵経洞から発見された文書の多くが、経典の残巻や反古である理由を「廃棄説」によって説明したのである。もっともスタイン自身は後年、自説を放棄してペリオの説を受け入れたようだが、[22] わが国の藤枝晃氏や土肥義和氏、中国の方広錩氏らはこの説を支持し、なかでも方広錩氏は、敦煌文

書の統計的な調査を通じて、この説に有力な根拠を示している。氏の近年の報告によると、①敦煌文書から発見された仏教経典はわずか四百種弱に過ぎず、当時の標準的な大蔵経（唐の智昇『開元釈教録』「現蔵入蔵目録」所収一〇七六種）の半数にも満たない。②敦煌文書はほとんどが使い古しの残巻であり、天竿（巻子本の巻首を保護するためにつけられた細い竹や木）と尾軸（巻子本の軸）が揃ったものは、中国国家図書館蔵の一六五七八部の中ではわずか八部、大英図書館蔵の約一四〇〇〇部の中でも三〇部に過ぎない、③敦煌文書は同じ経典の重複が多く、主要な八種の仏教経典の合計が、中国国家図書館所蔵のものでは全体の六六・三％、氏がデータ化した世界各地に散在する敦煌文書約六五〇〇〇部の中でも四四・二％を占めているという。さらに氏は、中国国家図書館蔵の敦煌文書の中から「この紙は故経処に安置されたし」と書かれた廃紙（『大般若波羅蜜多経』北敦〇七七一一号）を発見している。氏によれば、この「故経処」とは敦煌の寺院の中にあった廃紙の保管場所を指すという。[23]

では、敦煌写本『啓顔録』は、どうなのであろうか。

張鴻勳氏は、敦煌写本は遺漏や添削、修正がほとんど見られない「正式な写本」だという。

> 全篇は、最初の行の篇題の下に「辯捷」という二字の衍字、第二四行に「得云」という二字の補足、第五八行に「✓」という倒乙号（二つの文字が前後逆転していることを示す校正記号）*がある以外は、何の遺漏や添削、修正も見られない。（中略）これらの点は、この巻が正式な写本であることを表している。

＊（　）の中はいずれも引用者

確かに敦煌写本は整然とした写本である。しかし、詳しく見てみると、張鴻勳氏が指摘していない誤写があること

がわかる。たとえば、第二十五話「鄠縣有人將錢絹向市」には二十一字の衍文が見られる。

此人乃悉以錢絹求充驢鞍橋之直、空手還家。其妻問之、具以此報。妻語云：「何物鞍橋之直、空手還家。」其妻問之、具以此報。妻語云：「何物鞍橋、堪作下頷？縱送官府、分疏自應得脱、何須浪與他錢絹？」

その人は錢と絹をロバの鞍代に当ててもらうことにし、手ぶらで帰宅した。妻が尋ねると、一部始終を説明した。妻は言った。「どうして鞍代を、手ぶらで帰宅した」妻が尋ねると、一部始終を説明した。妻は言った「どうして鞍が顎になるのですか。たとえ役所に送られても、ちゃんと説明すれば難を逃れることはできたはず。なにも錢や絹をやることはなかったでしょう」

このほかにも第十四話「隨（ママ）時王德任尚書省員外爲人健忘」に七字、第二十一話「隨（ママ）時有一癡人車載烏豆入京糶之」に九文字、第二十二話「陳長沙王叔堅性驕豪暴虐」に八字と二十字と、あわせて六十五字の衍文が見られる。

張鴻勳氏が指摘するとおり、写本の作成自体はかなり丁寧に行われており、たとえば唐の太宗（李世民）の「世」を欠筆したり、「葉」の中の「世」を「云」に変えたり、玄宗（李隆基）の「基」と同音字の「幾」や「機」を欠筆したりと、慎重に諱を避けている。また、誤写した箇所には校正記号を付しており、たとえば、第一話「北齊高祖嘗以大齋日設聚會」の「物何」には「✓」という倒乙号（文字が前後転倒していることを示す記号）、第三十三話「隋朝有三四人共入店飲酒」の「踟」には削除を示す「卜」という記号が付されている。二十一字の衍文が見つかった第二十五話「鄠縣有人將錢絹向市」の「之」にも「、、」という記号が付されているが、これは原書にあった衍字を示すものであろう。ところが、これだけ丁寧に作成されたにも関わらず、六十五字の衍文には何の記号も付されていないので

ある。

ここから推測されるのは、写本を作成した劉丘子は、当初『啓顔録』の完全な写本を作成しようとしていたが、写本が終わった後で六十五字もの衍文に気づき、これを反古にしたのではないかということである。写本の末紙（第十四紙）の続きには、反古になった後で写本の練習にでも使われたのであろうか、『雑集時用要字壹仟三百言』という実用辞書の一部など二種の文がそれぞれ異なる筆跡で書かれている。

蔵経洞が封蔵された時期については諸説があるが、文書に見られる記年から、北宋の咸平五年（一〇〇二年）以降であることは確かである。[24] 敦煌写本が作られたのは、唐の開元十一年（七二三年）であるから、少なくとも二百七十九年以上が経過していたことになる。五代後晋の開運二年（九四五年）に編纂された『旧唐書』経籍志によれば、当時『啓顔録』は十巻本に増補されていたはずだが、それにも関わらず二百七十九年以上も前の古写本が蔵経洞の中に入れられたのは、それが貴重な文書だったからではなく、「敬惜字紙」の習慣によって「神聖な不用物の貯蔵庫」に廃棄されたからであろう。

結論

以上の考察から、『啓顔録』の作者、成立年代、敦煌写本と『太平広記』所引の諸作品との違い、敦煌写本が蔵経洞に封蔵された理由については、次のようにまとめることができよう。

① 『啓顔録』の作者については、従来隋の侯白とするのが通説であったが、これは後世の仮託と考えられる。侯白は科挙出身のエリート官僚で、『旌異記』の著者としても知られていたが、そのユーモラスな人柄で人々に愛される一方、それがあだとなって官僚としては不遇な生涯を終えることになった。侯白が『啓顔録』の作者に仮託

されたのは、恐らく当時の人々がその薄命を悼んだからであろう。

② 敦煌写本の原本となった『啓顔録』の成立年代は、作品中に登場する人物(温彦博)の官名から唐の貞観十年(六三六年)を上限とし、敦煌写本の題識に見られる開元十一年(七二三年)を下限とする八七年の間に成立したと考えられる。ただし、唐王朝の建国からすでに十八年以上が過ぎた貞観十年ごろを「国初」(わが王朝の初期)と呼んでいることから、実際の成立年代はこの範囲の中でもかなり後の方と思われる。

③ 『啓顔録』には敦煌写本のほかに、『太平広記』とその系統のテキストの計八種があるが、両者を比較すると、敦煌写本(七二三年)から『太平広記』(九七八年)までの二百五十年ほどの間に、『啓顔録』はその姿をかなり変えていたことがわかる。両者に共通する作品は全体の三割強に過ぎず、その内容も「野干和尚」の例に見られるように不用意な改訂が行われている。こうした改訂作業の中で、狂言「附子」に類似したモチーフを持つ作品も散逸してしまったと考えられる。

④ 敦煌写本が蔵経洞に封蔵された理由としては、スタインが提唱し、方広錩氏らによって補強された「廃棄説」を支持したい。敦煌写本は、美しい書体で整然と抄写され、また各種の校正記号を使って慎重に校正を進めているが、なぜか六十五字もの誤写が未校訂のままとなっている。恐らくはこの誤写のために反古とされ、巻末の一部が再利用された後、「敬惜字紙」の習慣に従って「神聖な不用品の貯蔵庫」である蔵経洞に封蔵されたのであろう。

このように狂言「附子」とアジアとの繋がりを明らかにしたこの作品(敦煌写本『啓顔録』大英図書館蔵S六一〇第三十九話)は、唐から宋にかけて行われた『啓顔録』の改訂作業の中で一度は散逸したものの、たまたま誤写によって反故とされた唐代の古写本が中国古来の「敬惜字紙」の習慣によってシルクロードの仏教石窟に封蔵されたた

めに、十九世紀の末、同石窟の発見とともに再び我々の前にその姿を現したのである。

参考文献

書籍

・田口和夫『能・狂言研究――中世文芸論考』（三弥井書店、一九九七年）
・曹林娣・李泉輯注『啓顔録』（上海古籍出版社、一九九〇年）
・張鴻勲『敦煌俗文学研究』（甘粛教育出版社、二〇〇二年）
・方広錩『方広錩敦煌遺書散論』（上海古籍出版社、二〇一〇年）
・董志翹『啓顔録箋注』（中華書局、二〇一四年）

論文

・小林博臣「敦煌文学口語資料（一）『啓顔録』敦煌巻子本考察」（中国研究（神戸外国語大学）六号、一九五八年）
・曹林娣「『啓顔録』及其遺文」（蘇州大學學報第一期、一九八九年）
・張繼紅「淺論『啓顔録』」（齊魯學刊第六期、一九九一年）
・郭娟玉「『啓顔録』初探」（大陸雑誌第九四巻第四期、一九九七年）
・董志翹「輯注本『啓顔録』詞語注釋商兌」（南京師範大學文學院學報第一期、二〇〇六年三月）
・黄征「輯注本『啓顔録』匡補」（俗語言研究第二輯、二〇〇六年六月）
・吳俐雯「『啓顔録』探析」（香港・新亞論叢第九期、二〇〇七年）
・潘靈芝「論敦煌本『啓顔録』中關于佛教的笑話」（東南大學學報第二期、二〇〇八年）

・朱瑤「『啓顔録』成書考」（第三屆中國俗文化國際學書研討會暨項楚教授七十華誕學術討會論文集、二〇〇九年）
・馬培潔「『啓顔録』與中古時期的笑話集」（西北師範大學碩士學位論文、二〇〇九年）

注

（1）田口和夫『能・狂言研究――中世文芸論考』（三弥井書店、一九九七年）六五三～四頁
（2）石崎又造「支那笑話と狂言記・咄本三種」（国語と国文学、一九三八年四月特輯号）
（3）涵芬楼明抄本『説郛』巻六十五所引宋周文玘『開顔集』
（4）敦煌写本『啓顔録』（大英図書館蔵S六一〇）第三十九話「嘗有一僧忽憶餖喫」
（5）張鴻勲「敦煌本『啓顔録』的発現及其文献価値」（『敦煌俗文学研究』甘粛教育出版社、二〇〇二年所収）
（6）（南宋）陳振孫『直斎書録解題』巻十一小説家類
（7）『隋書』巻五八陸爽伝附侯白
（8）『北齊書』方伎伝皇甫玉には石動統、『北史』芸術伝上皇甫玉には石動桶と記されている。
（9）敦煌写本では〔　〕内の温彦博の言葉がぬけているため、『太平広記』によってこれを補った。
（10）（唐）劉肅撰『大唐新語』巻十三諧謔
（11）他の六種のテキストとその引用作品数は次のとおり。（宋）曾慥『類説』（十七話）、（明）陳禹謨『広滑稽』（五十二話）、（明）許自昌『捧腹編』（二十五話）、（明）呉永『続百川学海』（十一話）、（明）陶珽『重較説郛』（十一話）、（清）呉曽祺『旧小説』（十六話）。このほか（清）王仁俊『経籍佚文』も一話を収める。このうち（宋）曾慥『類説』には敦煌写本と『太平広記』のいずれにも見られない三話を収める。（董志翹『啓顔録箋注』四～八頁）
（12）張鴻勲「敦煌本『啓顔録』的発現及其文献価値」（『敦煌俗文学研究』甘粛教育出版社、二〇〇二年所収）
（13）南方熊楠「本邦に於ける動物崇拝」（東京人類学雑誌第二五巻第二九一号、一九一〇年）

(14) The American Heritage Dictionary of the English Language, Fifth Edition, Houghton Mifflin Harcourt, 2011

(15) 『日本霊異記』上巻第二「狐為妻令生子縁(狐を妻として子を生ましめし縁)」

(16) 董志翹「輯注本『啓顔録』詞語注釈商兑」(南京師範大学文学院学報二〇〇六年第一期)

(17) Aurel Stein: Serindia: Detailed report of explorations in Central Asia and westernmost China, 5 vols. London & Oxford, Clarendon Press.1921. vol.2 Chap.XXII Exploration of a walled-up hoard, p.820

(18) (宋)洪邁『夷堅志』夷堅支甲巻第六・兜率寺経

(19) (明)郎瑛『七修類稿』巻四十九奇謔類「王沂公生」

(20) 片岡巌『台湾風俗誌』(台湾日日新報社、一九二一年)一五八～九頁

(21) 『全唐文』巻七百八十九、劉蛻「梓州兜率寺文塚銘」

(22) スタインは一九三三年に出版したOn Ancient Central-Asian Tracksの中で「ペリオ教授が収集した資料の調査から、この大宝庫の閉鎖は、一一世紀の初頭に行われたものという結論が出された。おそらく、この辺境地域がタングート族に征服されて、この聖跡の宗教的諸設備が危険にさらされるようになった時期のことと思われる。」(沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』白水社、一九六六年)と述べている。

(23) 方広錩氏の近年の研究成果は、一九九〇年に敦煌学国際シンポジウムで発表した論文「敦煌蔵経洞封閉原因之我見」に附注として加えたものが『方広錩敦煌遺書散論』(上海古籍出版社、二〇一〇年)に収録されている。

(24) 敦煌文書に記された年号の中でもっとも新しいものは、ロシア科学アカデミーサンクトペテルブルク支局東洋学研究所が所蔵するΦ三二Aに見られる「維大宋咸平五年壬寅歳五月十五日記」と「維大宋咸平五年壬寅歳七月十五日記」で、「咸平」は北宋の真宗の時代の年号、「咸平五年」は西暦一〇〇二年に当たる。